8
AUGUST, 1982

教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1982 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三一・三四五二 芦屋市船戸町12—6

マリアを通してイエズスへ

「あなたは女の中で祝福された方！」(ルカ1・42)

「聖霊に満たされた」エリザベトが、神の御母処女マリアに向かって「声高く」(ルカ1・41～42)なげかけたこのあいさつは、何世紀にもわたり繰り返され、今もこだましています。これは、今夜のごミサに、とくにふさわしいあいさつです。というのも、至聖なるマリアさまをたたえ祝うために、この聖堂に集いましたが、今日は、マリアさまが、マセビエイのほら穴に出現され、ベルナデッタに、憐みと恩寵に満ちた特別のメッセージをお告げになった日であるからです。このメッセージの価値が、こんにちでも、少しもうすれていないことは、誰の目にもあきらかです。

あの名もない少女を利用して、マリアさまが何にもまして望まれたのは、罪人に改心を呼びかけること、忠実なキリスト信者がみな罪人の改心と救いに真剣な努力を傾けるよう呼びかけること、でした。(…)事実、マリアの呼びかけは、「教会に熱心な祈りと愛徳実行の気運を換起したが、なかでも病者や貧しい人々への奉仕活動が盛んになった」のです。

かけがえのない役割り

まさにこの「熱心な祈りと愛徳」こそ今私たちが実行すべきことなのです。愛の絆である聖なる秘跡、ご聖体を祝うために共に集う今、痛みや苦しみと戦う方々に最前列を占めていただきました。ルルドの処女マリアのメッセージはいつの時代にも重要な意味をもち続けていますが、そのメッセージにかんがみて、みなさんは一番前の席をしめておられます。みなさんは救いのご計画のなかでかけがえのない役割、独自の役割をになっておられるからです。ただし、救い主イエズス・キリスト、つまりご受難とご死去、ご復活によって救いの主人公・証人になった御方と一致していなければなりません。

ですから、マリアさまにあいさつをすませた今、愛をこめて、みなさんに心をむけ、ご健康を祈るとともに、色々な困難にもかかわらず犠牲を払ってここに来てくださったことに心から感謝いたします。さらに、深い思いやりの心に動かされ同伴してくださった方々にも、心からありがとうと申します。みなさん方は、何度も何度も思いやり深く援助の手をさしのべ、たいへん功徳に富む兄弟愛の奉仕をしてくださっています。(…)

今日だけでなく毎日、みなさんは、社会学や専門の分野での限定されたことばでは言い表わすことのできない仕事をしてくださっています。キリスト教では、それを「愛徳」と称し、たたえられる、はっきりとした中味をもつ仕事なのです。福音の教えに従い、神の御独子イエズス・キリストのみ名において、弱い人々を気づかうことであるからです。

「病気だったときに見舞ってくれた」(マテオ25・36)ときには、感謝しようにも力なく、声もでない病者にかわって、みなさんに感謝いたします。

〈マニフィカト〉の崇高な教え

「あなたは女の中で祝福された方！」

きょうの聖母マリアの祝日に、エリザベトが霊感を受けて口にしたことばをくり返して、聖母へ崇敬をあらわすあいさつといたしましたが、これだけでは完全ではありません。聖福音書によると、ザカリアの家でエリザベトが口にしたことばが他にもまだあります。冒頭のことばはこのあいさつとあわさってはじめて、完全になります。エリザベトは、「あなたの御子も祝福されたかたです！」とすぐに言いたして、母と子を切り離すどころか、かえって両者をぴったりと結びつけたのです。そこで私たちも、生き生きした信仰にふさわしい燃える愛の力をもってすばやく、主イエズスにあいさつしなければなりません。私たちにとっても、「マリアを通してイエズスへ」ということばには、ほんとうの意味のあることが証明されなければならないのです。そうすれば、きょうのごミサを機会にもっとイエズスに近寄り、マリアの「ご胎内の祝福された御子」、つまりイエズスへの信仰を宣言することができるでしょう。

よく考えてみましょう。「山地のユダの町にある家」(ルカ1・39参照)にマリアさまがいらしたということは、いったい何を意味しているのでしょう。単なる親切だったのでしょうか。それとも、老人ながらみごもった親戚へのやさしいいたわりだったのでしょうか。(ルカ1・36参照)もっぱら人間的レベルからだけの援助だったのでしょうか。いいえ、それだけではありませんでした。マリアさまが、そこにおられたことには、深い意味があり、実に豊かな霊的な実りをもたらしたのです。従姉(エリザベト)に、他に比べようもないほどの、恩寵と喜びと光の贈り物のみならず、のちに先駆者となるヨハネが母に寛大なおくりものをするよう仕向けたからです。実際、マリアの「あいさつを聞くとすぐ」、胎内の子がおどり、老婦人は自分も聖霊にみたされ、なぐさめを感じたので、あいさつをかえさずにはいられませんでした。それだけではありません。聖霊の光に照らされ非凡な洞察力を得たので、若い従妹が主の御母であることを認めることさえできたのです。

これこそ、天主の聖寵の御母マリアが私たちのために得てくださったよりすぐりの贈りもの、私たちをイエズスの方へ連れていく、というよりもむしろ、イエズスを私たちのもとへ連れて来るときに得てくださる贈り物なのです。

マリアはイエズスを連れてきてくださる

きょうの福音書は、マリアとエリザベトの出会いを事細かく伝えるだけでなく、マリアさまが、そのときどのような返事をされたかも伝えています。「ご胎内の御子」(ルカ1・

45）とともに祝福された方、と呼ばれ、また「しあわせな…信じた方」と呼ばれて、マリアは確かに返事をしたのですが、エリザベトではなく、主にむかってでありました。「いやしいはしため」の心で、すばらしい賛歌を、主にうたいあげたのです。新約聖書の数ある賛歌のうち最高の賛歌、マニフィカトは、その時々に、ほんとうに心をこめて唱えたいものです。マリアさまとの霊的な一致のうちに、一言一句を聖母についてくり返してゆけば、どのようにして主をたたえるべきか、またなぜ、あがめるべきかを学ぶことができるでしょう。

そうすれば、神のみが偉大であり、それゆえ神を賛美しなければならないことを教わることができます。神のみが私たちの救い主であらせられるから、神において、私たちの精神が喜ぶべきであることを悟ることができるのです。あわれみ深い神は私たちのところへ、いわば腰をかがめて近づき、御力をもって、私たちを高めてくださいます。マニフィカトはまことに崇高な教えですから、どのような状況にいても、私たちはその教えを自分の血とし肉とすることができますし、またそうしなければなりません。恩寵や光の賜物をうけるだけでなく、試練や体の苦しみをものともせずに、耐えることができるためなのです。病にふす兄弟のみなさんにとっても、この賛歌がなぐさめと平安の源となり、苦しみをささげ祈るときに、みなさんのささえとなりますように。(…)

私にはよくわかっております。今回もみなさんの祈りによる励ましと、苦しみの功徳を受けていることを。この場で、心から、ありがとう、と申し上げます。私は私で、ごミサのあいだに、教会の生命のいぶきともいうべき愛徳とひとつになって、みなさん方ご自身とみなさん方のご健康のためにお祈りいたします。アーメン。　（一九八二・二・十一）

家庭を本来の姿に

「神にえらばれたものであるあなたたちは、聖なるもの、愛されるものとして、深い慈悲、なさけ、謙遜、柔和、寛容をまといなさい。たがいに忍び、他人に不平があってもゆるしあいなさい。」(コロサイ3・12～13)

聖パウロの右のことばをみなさんへの私のあいさつにかえたいと思います。(…)

私、教皇はきょう、キリストのみ名によってここに来ました。ペトロの信仰が強くなり、兄弟たちの信仰を固めることができるように、ペトロのために祈られた、キリストのみ名においてやってまいりました。

神の御子のみ名において、きょう、ここに来ました。人となり、私たちのうち、〈家庭の中心に〉居を定められた御子のみ名においてやってきたのです。喜びや悲しみをよくご存知です。家族の希望や落胆もよく理解しておられますし、それぞれの家族の歴史となる数数のできごとにも加わってくださいます。

きょうのご聖体を祝うにあたり、愛と一致、あわれみ、ゆるし、忍耐、希望や大望、仕事、家族の苦しみと心配ごとなど、これらすべてをひとつにまとめ、御子イエズス・キリストを通して、十字架の犠牲にあわせ、霊的いけにえとして、天の御父に捧げたいと思います。みなさんと共に、みなさんのために祈り、愛の力を信じる私たちを見ていただきたいのです。愛があれば、心の中から悪を閉め出し、根こそぎにすることができます。「愛をまとえ。」という聖パウロの勧めを実行するようぜひ頑張ってください。「愛をまとえ」ば、みなさんの心はキリストの平和にみたされることでしょう。(コロサイ3・14～15参照)

本来の姿に戻りなさい

1　兄弟のみなさん。この国の人々の家庭についての考え方のなかには、伝統的なすばらしい点がたくさんあります。家族の結びつきはとても強く、子どもは、神の恵みと見なされ、結婚の冠として望まれている。家族は大きく、孤児や、年長者、それに貧しい人々を含む暖かい環境が作られている。

しかしながら、暗い影のあることもいなめません。ほとんどの人々は、今も昔も、一夫一婦制を守っていますが、昔からのみなさんの考え方によると、一夫多妻を否定しない傾向がある。時として、女性の正当な権利が奪われてしまうこともありました。そのうえ、この国も、離婚、避妊、堕胎など、基本的な価値観の堕落をもたらす憂慮すべき事態、家庭の敵の影響をうけています。

この国の人々へお願いしたいこと、それは私が、使徒的勧告『ファミリアリス・コンソルツィオ』で、世界中のキリスト教家庭にあてた願いと同じものです。「家庭よ、本来の姿に戻りなさい。」

2　家庭とは、神からのものです。一組の男女の愛の契約を取り決めてくださったのは創造主です。二人の愛を祝福し、相互に助け合うための力の源としてくださいました。死の訪れるまで実り多い日々をすごしつつ永続するように制定されたのです。創造主のご計画によると、家庭とは、人々の共同体のことを言います。ですから、家族のメンバーが、「互いに敬い合うことこそ、家庭内における、愛と生命の根本的な姿」です。夫も妻も最大限お互いを敬い尊ばなければなりません。親であるみなさん、子どもたち独自の人格を尊重しましょう。子どもたち、親にはすなおに従い、親を敬いなさい。家族のメンバーはだれでも、自分は受け入れられ、尊重されている、と感じるようでなければなりません。だれもが家族の愛を必要としているからですが、ことに、お年寄りや、ご病人は、なおさらその必要があります。

「敬う」の最も深い意味は、忠実ということになるでしょう。敬うとは、互いを受け入れ合い、信頼し合い、慕い合うこと、また忍耐強く、ゆるし合うことであります。必要なときには、困難をのりこえ、困難にもかかわらずそうしなければなりません。たとえどのようなことがあっても、愛し合いなさい。愛に欠くことがあってはなりません。ご夫婦の方方にお願いします。互いのため、子どものために、自分を犠牲にしてください。相手を裏切ることのないようにあらゆる誘惑をこばんでください。

社会が、もっと没個性的になり、規格化される、つまり不人情で、非人間的になるのを望まないのなら、家庭生活を強めなければなりません。家庭を愛しなさい、尊びなさい。

説教・講話・書簡等の抄訳

聖人になるように　互いに助け合いなさい

3　国家のために、具体的にどのような貢献をしていますか。私はもう一度こう申しましょう。「本来の姿に戻りなさい、つまり、社会を構成する、第一にして絶対に必要な細胞となること。家庭から市民が誕生し、家庭内において始めて、社会の存続と発展を鼓舞する社会生活に必要な徳を学ぶことができます。」（ファミリアリス・コンソルツィオ42）家庭においてこそ、人は一個人としての存在を認められ、自分自身の尊厳に気づきます。そして、社会的な経験と活動を深め、唯一無二の存在として社会のわく組みの中で働くのです。

兄弟のみなさん、（祖国を愛するならば、自分の家庭生活を愛しなさい。）社会が、もっと没個性的になり、規格化される、つまり不人情で、非人間的になるのを望まないのなら、家庭生活を強めなければなりません。家庭を愛しなさい、尊びなさい。

若い人たちは、祈りと自己修養に励み、互いに尊重しあい、貞潔を保って、結婚への準備をしなさい。自分自身をすべて寛大に与え尽くそうとすれば、安定した結婚生活における愛においてよりほかにありません。

4　みなさんにはイエズスの弟子としての威厳と責任が備わっていますが、それは、みなさんが、聖人になるために、そして互いに助け合う、つまり教会と世界を聖化するために、召されているという事実と関係があります。聖パウロのことばに耳を傾けましょう。「キリストのみことばを、あなたたちのうちに豊かに住まわせ、すべての知恵によって、教えあい、いましめあい」なさい。（コロサイ3・12）

聖人になってください。神の贈りものである信仰と希望と愛によって。個人的に、あるいは家族としてささげる祈りを通じて。わたしたちの天にまします御父を心から信頼することで。よい模範となり、秘跡に養なわれ支えられ、恩寵に充ちた生活を送ることによって。このようにして聖人になってください。地域社会、教区や管区で、司教や司祭を敬い、教会生活に参与することによって、聖人になってください。「愛の奉仕」のうちに、つまり神を愛し、人々、とくに家族を愛する努力において、聖人になり、社会と国家、それにその活動を聖化してください。（…）

家族そろって祈る習慣をたたえたいと思います。みなさん、私は、きょう、みなさんが、家族の祈り、それも毎日の家族の祈りをふやしてくださるようお願いします。夫婦揃って、また親子が一緒に祈るようにしてください。とくにロザリオの信心を深めてください。キリストの御母であり、教会の御母であらせられる聖母にもっと祈りの声をあげてほしいのです。主イエズス・キリストのみ名によってともに祈る家族は、つねに神の祝福をうけることでしょう。（…）

イエズスはおおせになりました。「……あなたたちは諸国に弟子をつくりにいき、聖父と聖子と聖霊との、み名によって洗礼をさずけなさい（マテオ28・19）と。私はこの教えに従って今みなさんと共にいるのです。様々な教区を代表する洗礼志願者のみなさんに、まもなく私は洗礼と堅信の秘跡をさずけます。教会が、忠実に「良い知らせ」を宣べ伝え、この地にまかれた種は実を結びました。人間の償いのために、御血を流されたイエズス・キリストのおかげでキリストの、つまり教会の新しいメンバーを迎えることができるのです。

洗礼においてキリストと共によみがえる

洗礼志願者のみなさんは、まもなく水と生けるみことばの力によって浄められて（コロサイ5・26）、神の本性にあずかる神の養子となります。受洗者と私たち全員が心をひとつにして、主のご受難・ご死去・ご復活がもつ力に対する、教会の信仰を宣言することになります。洗礼をうけてキリストと共に葬られるだけでなく、主とともに復活します。なぜかというと、私たちは、キリストを死者の中から復活させたもうた神の力を信じているからです。（コロサイ2・12参照）

ここにいる兄弟たちは、堅信の秘跡に与って、強められ、教会の活動的なメンバーとなり、信仰と愛のうちに、キリストの神秘体を築いてゆくことでしょう。聖霊の賜物で封印され、愛のうちに教会に仕えるためなのです。

洗礼と堅信、ご聖体の秘跡、つまりキリスト教入信式は、私たちがキリストの証人であることを思い起こさせてくれます。もっと大きな愛をもてるように、主が私たちの心を動かしてくださいますように。

この国の全家庭のために、生命の主、キリストにお祈りします。いきいきとした信仰の証人となるため努力している人々、信仰は異なっても、家庭生活の高い理想を尊重する人人、ばらばらになった家族、困難にみまわれている、さらに、やもめや孤児たち、――このような人々みんなのために主にお祈りしています。

ナザレトの聖家族、イエズス・マリア・ヨゼフが、すべての家庭を祝福してくださいますように。アーメン。（一九八二・二・十三アフリカ）

テレビとラジオ

（…）『ファミリアリス・コンソルツィオ』（家族について）でお話したように、マス・メディアは「家族生活と習慣、子供の教育に有益ではあるが、同時に、危険やわなを含んでいることも無視できない事実です。」（76）したがって、「親は、批判的で慎重、かつ油断のない態度で、メディアを適切に使用するよう積極的に取り組まなければなりません。さらにプログラムの内容そのものの選択・作成に対しても現実参加を果さなければなりません。適宜、主導権をにぎり、製作および放送放映の各段階の責任者とたえず接触を保つ必要があるのです。」（76）おわかりのように、上のことばは視聴者協会がめざす目的でありますが、とくに、家族の立場を考慮した考え方です。

事実、ラジオやテレビが、個々の人間の成長、とくに家族の成長に役立たないとすれば、それこそ、存在の理由をなくしてしまうわけです。私が成長というのは、宗教的な面だけを考えてのことではありません。とくに、人間的、文化的面について言っているのです。ほんとうの意味で人間的なものであれば、すでに含蓄的にキリスト教的であると確信しているからなのです。

じっくり検討し、評価し、判断を下すべき

なんとしても必要なこと、それは、より「批判的」な人を養成すること、つまり、ラジオ・テレビが提供するものを、みずからの精神的成熟度を基準にして、じっくりと検討し、評価し、判断を下せる人を養成することなのです。ところで、一番大切なことと言えば、それは、視聴者の内的トレーニングにほかなりません。責任感が充分に強く、マス・メディアを前にしても、単なる受容的受身的な態度に甘んじず、かえって積極的にメディアに制限を加えうる人が必要なのです。逆に、メディアにふりまわされてはなりません。この点に関して、公的あるいは私的な機関が、学齢児童から成人にいたるまでの人を対象に、視聴者訓練コースを設置して、視聴の専門家を作れ、というみなさんの提案に賛成です。

（一九八二・四・十七）

不変の教え

信仰、希望、愛の生活

（…）病に苦しんでいるみなさん、私の心からの愛を受けてください。心身ともに苦しんでいるみなさんに心を向け、みなさんと心を一つにして苦しみをわかち合いたいと思います。また、ここで私は、みなさんの健康を案じ、憂慮しておられるご家族の方々のことも考えております。

苦しみと希望

世界中の病院と同じくこの病院もまた、苦しみと希望の場であります。病棟や病室に足を踏み入れると同時に、人間性の弱さやもろさというものを痛切に感じます。もろもろの危険や脅威にさらされている人間性は、いつなんどき、その調和のとれた均衡をこわされて、病気になったり、力を失ったりするかわからないのです。それが、人の精神をさいなむ非常に辛い衝撃的なかたちで姿をあらわします。苦しむ人は、からだが衰えるにつれ、ますます鋭く孤独を感じ、家族や友だちや医者の救いの手やなぐさめを強く願うようになります。そして、神への哀願。……実に、神のみ、ほんとうの意味で助けを与え、苦しみの意味を説明することがおできになるのです。

ここはまた、希望の場でもあります。まず、生命の美しさを抑えることはできないと感じる病に伏す人自身の希望。ついで、病に伏す人々と共に苦しみ、回復のよい知らせを待ちつつ、信頼してよい経過をのぞんでいる肉親や友人たちの希望。

この希望が一日も早くかなえられることを望みながら、病に苦しんでいるみなさんに、キリストと教会と教皇がみなさんに対していだく愛を伝え、そして示すためにまいりました。ここでのみなさんの苦しみは無益どころか、大変役に立つ苦しみなのです。主キリストは、ご託身により、人間性と共に、苦しみや死を受けいれてくださいました。すべての人々、とくに、弱く、苦しんでいるみなさんを呼び、世の救いに協力せよとおおせになるのです。この神秘的な苦しみへの召命とは、つまり愛することへの召命であります。慈悲深い御父なる神を愛することであり、他の人々、兄弟や姉妹を愛することなのです。キリストの十字架のみが、闇(くら)い知恵を照らし、この光のもとでのみ、苦しみのもつ人間的キリスト教的実りがもつ深い意義を垣間見ることができるのです。

健康と命を守る

希望を支えとして苦しむところ、つまり病院はまた、努力をおしまず、この希望をなるたけ早く実現させようと努める場でもあります。医療活動はもともと、人の生命を守り、病に苦しむ人々の健康回復を目指しています。ずっと昔の、（医学の祖と称される）ヒポクラトの誓い（医者になるものの行なった倫理綱領の宣誓のこと）にはすでに、医者の目標として先にのべた点を課しています。誓いのなかには次のような箇所があります。「私は、みずからの能力と判断に従い、患者に危険や害を加えないように注意して、健康回復のために食療法を用いる。また、依頼人がだれであろうとも、死に至らしめるがごとき薬は調合しないのはもちろん、それに類したことは一切しない。同様にいかなる女性にも、堕胎のためのペッサリーを調達しない。」

この宣誓より二十四世紀のち、一九四八年に世界医学者協会により認められた「ジュネーヴ宣言」は、実質的に全く同じ考えを提案しました。それによると、医療活動にたずさわる人はこのように約束しています。「私は、生涯をかけて人々に役立つことを正式に約束いたします。私の職務の尊さを守り、誠実に務めを果します。患者の健康こそが、自分にとって第一の関心事であり、……受胎の瞬間から始まる人間の生命は絶対的に尊ぶ覚悟であります。」

献身的に全てをなげうって人々の健康と生命を守るからこそ、誰もが、医者や医療関係者に格別の敬意を払うのです。他の仕事が大切でないと言うわけではありませんが、医者という職業が社会的にも卓越していることをだれでもが快く認めるのは、それが、この世において受けることのできるすべての善の基礎となり前提となる、一つの善を守ることこそ医者の仕事であるからなのです。

聖書も、はっきりとこの点を認め、人々に次のように勧めています。「医者には、その奉仕を考えて、当然尊敬の念を示せ。」（集会の書38・1）そしてまた、「医者のもつ知識は、かれの頭を上げさせ、勢力者を感嘆させる。」（集会の書38・3）とも言っています。

信仰するものにとって、病気のときでも、第一の主な希望の源は、主の御助けであることにかわりはありません。主の全能は、いかなる病をも、克服することができるのです。それで聖書も病に伏す人々に、祈れ、自分を清く保て、つぐないの犠牲をささげよ、と勧めています。しかし、だからといって、祈りや犠牲だけで、医学の助けを借りるなというのではありません。医学の大切な役目についても、神のみ摂理のご計画に含まれているからです。先の勧めのあとで同じ聖書は、「…医者にまかせよ、かれも、主につくられたのだから。かれを遠ざけるな、あなたにはかれがいる。」（集会の書38・12）と勧めています。

貴い人命

ですから、医者と、医療関係や補助的役割りを果すみなさんが、高く評価されるのは当然であります。みなさんは人命というこの上なく貴い善を守っておいでになるからです。

わたしたちは、それぞれに備わっている能力を具体的に使って人々に貢献するために生命をさずけられました。生命を与えられた私たちは、自分のうちに、また歴史のうちに、愛と善、喜び、正義や平和といった、人々の熱望する価値を具体的にあらわさなければなりません。

信仰の光に照らしてみると、人の一生は、恩寵を受けるときであることもわかります。その間に神は、日々、信仰、希望、愛の生活をうながし、人の心を試されるのです。恩寵のときとは、一人ひとりが、みずからをささげることによって逆に、永遠に続く富で自分を豊かにするための時間であります。ところで永遠につづく富は、この世においてどのくらい愛を実行しているかによって決ってくるのです。

人生は、全体的にみても、一部分を取りあげても、とても貴重なものであるわけです。そこで、全力を尽くして人命を守り、また正常に活動できるまでに回復させ、完全に発達するのを助ける人々には、万人の感謝をうける権利があります。反対に、どんな方法であろうと、人命を攻撃するものは、重大な罪を犯して自らを汚し、かの審判の厳しい判決をまぬがれないでしょう。そこでは控訴することなどできません。まことに、良心は、神の鏡であります。（…）

みなさんと、みなさんの愛していらっしゃる人々のために、心の平和を神に願いつつ、使徒的祝福を送ります。（一九八一・十二・二〇）

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部六十円送料六十円
■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393